

13. 甲状腺腫瘍と鑑別困難な schwannoma の 1 症例の画像診断

原 嶽 杉浦 康弘 西崎 恒男
(協立総合病院・内)
加藤 芳司 (同・外)
藤野 雅彦 (名大・一病理)

Schwanoma (神経鞘腫) は良性腫瘍で頸部の発生は比較的稀である。症例は39歳の女性で右頸部腫瘍を指摘された。超音波検査で甲状腺右葉に境界明瞭な低エコーレベルの腫瘍性病変を認めた。Tc, Tl 同時投与シンチグラムでは正常画像所見で、甲状腺腫瘍は否定的であった。しかし、CT-scan では右葉内に low density の所見を得、MRI では T2 強調画像冠状断で食道の圧迫像を認め、甲状腺悪性腫瘍の疑いがもたれた。腫瘍摘出術後そのマクロ所見では全く甲状腺と連続性がなく、確定診断では甲状腺に近接した神経鞘腫と診断された。

14. 甲状腺腫瘍と鑑別困難であった Hemangiopericytoma (HPC) の 1 症例

原 嶽 杉浦 康弘 西崎 恒男
(協立総合病院・内)
加藤 芳司 (同・外)
藤野 雅彦 (名大・一病理)

甲状腺に近接し甲状腺疾患と鑑別が困難であった HPC の 1 例を経験したので報告する。超音波検査では甲状腺左葉領域に甲状腺組織よりエコーレベルの低い充実性腫瘍性病変を認めた。Tc シンチグラムでは左葉領域に RI の集積で欠損像、Tl で強い集積を甲状腺腫瘍に一致する所見を認めた。CT-scan および MRI でも、左葉から腫瘍性病変が上方へ進展していた。術後のマクロ所見では腫瘍は甲状腺と全く連続性がなく、病理標本では HPC と診断され、甲状腺は正常組織であった。

15. Tl-201 肺 SPECT で描出した radiologically occult 肺癌の 1 例

利波 紀久 横山 邦彦 滝 淳一
(金沢大・核)
久田 欣一 渡辺 洋宇 (同・一外)
高島 力 野々村昭孝 (同・放)
(同・病理部)

Tl-201 SPECT 検査で radiologically occult 早期肺癌症例を提示した。66歳男性、喫煙者で無症状。肺癌健診で喀痰細胞診陽性で精密検診となる。胸部 X 線写真異常認めず、コンピュータ断層像、CT でも病巣指摘できなかった。

気管支ファイバーで右気管支 3b に腫瘍様病巣があり、生検で扁平上皮癌が示唆された。Tl-201 chloride を 6 mCi (222 MBq) 静注し 15 分と 3 時間後に対向 2 検出器ガンマカメラ (ZLC-7500, Siemens-Shimadzu 製) で胸部を SPECT 撮像した。

両スキャンのいずれの断層像においても右肺門近傍に明瞭な異常集積が観察された。縦隔には異常は認めなかった。右上葉切除と縦隔廓清が施行され、肉眼的に右気管支 3B に長径 15 mm の長さで気管支粘膜を取り巻くように病巣は存在した。病理的には高分化型の扁平上皮癌で早期癌であった。

本法により形態画像で不明な肺癌病巣の描出の可能性を強調した。

16. 末期慢性腎不全に伴う肥大心におけるジピリダモール負荷タリウム心筋シンチグラフィの意義

千田 豊 水谷 安秀 野北 裕
(社会保険羽津病院・内)
松村 要 伊藤 繩朗 吉田 亘孝
安田 龍市 高木 黙 (同・放)
高橋 明彦 篠原 有幸 (同・検査部)

[目的] dipyridamole 負荷 Tl SPECT を用いて末期慢性腎不全に伴う肥大心の冠循環動態を肥大型心筋症と比較検討した。[対象] 1) 末期慢性腎不全患者 10 名、2) 肥大型心筋症 9 名、3) 健常者 7 名。[方法] dipyridamole 0.56 mg/kg を 4 分間で静注後、Tl 74 MBq (2 mCi) を静注し回転型ガンマカメラで SPECT および Planar 像

を撮像しさらに3時間後、再分布像を撮像した。washout rateはPlanar像LAOのprofile curveとSPECTを用いたBull's-eye mapより算出した。【結果】末期慢性腎不全の肥大心では初期像で肥大型心筋症と類似したTIの集積低下部位を各所に認めたが再分布像では異なる様相を呈した。また慢性腎不全群はwashout rateが平均54.2%で健常群の平均49.5%、肥大型心筋症群の平均24.8%に比しそれぞれ有意に高値を示し、肥大型心筋症群は健常群に比し有意に低値を示した。以上より同様な心肥大を呈しているにもかかわらず末期慢性腎不全では肥大型心筋症とは異なる機序の冠循環動態が存在する可能性が示唆された。

17. タリウム再投与における心筋 viability の検討

玉井 琢也 小西 得司 上田 裕司
岡本 紳也 中野 趟 (三重大・一内)

陳旧性心筋梗塞例(OMI)におけるタリウム再投与による心筋viabilityの評価について検討した。OMI48例に運動負荷心筋シンチグラムを施行し、負荷時、4時間後、タリウム再投与後にSPECTの撮像を行った。左室を9seg.に分け、RIの集積から、6段階に分類し評価した。結果は、明らかに集積低下が認められた心筋梗塞領域145seg.中34seg.(23%)にタリウム再投与後に集積が認められた。虚血領域18seg.中12seg.に4時間

後像で再分布が認められ、タリウム再投与後に5seg.に集積の増強が認められた。左室造影で、完全欠損群とタリウム再投与で再分布のあった群を比較すると、後者の方がより壁運動の障害は軽度であった。以上よりタリウムの再投与は心筋viabilityの評価に有用であった。

18. Acute myocardial stunning: 運動負荷心プールシンチグラフィーによる評価

玉井 琢也 小西 得司 中野 趟
(三重大・一内)

運動負荷時の心筋虚血におけるacute myocardial stunningについて運動負荷心プールシンチグラフィー(ERNV)を用いて検討した。虚血性心疾患26例にERNVを施行し、負荷時、終了直後、5分、10分、20分後に各3分間の撮像を行った。26例中21例に負荷直後にLVEFの上昇(5%以上)を認めたが、peak systolic pressure/LVESVに有意な差はなく、心機能の改善はなかった。運動負荷にて、左室壁運動異常(RWMA)を20例48seg.に認めた。48seg.中21seg.は運動負荷後にRWMAが出現した。11例に胸痛、14例に心電図上STの低下を認めたが、ともに負荷後5分以内に消失した。しかし、RWMAは16例27seg.(26%)に負荷後20分以上持続した。また、90%狭窄以上の重症冠動脈病変例ではよりRWMAが遷延する傾向にあった。